

江戸時代ネズミ絵画によるイエネズミの考察

桜井 富士朗¹

人家やその周辺で暮らすイエネズミ(クマネズミ, ドブネズミ, ハツカネズミ)は, 現代では衛生害獣として嫌われているが, 江戸時代の動物画では吉祥の題材として描かれている。本研究は, 日本人とネズミとの関わりを検討し, 江戸絵画に描かれている特徴からイエネズミの種類を同定する試みである。

Key words : イエネズミ・ドブネズミ・クマネズミ・ハツカネズミ・江戸絵画

1 はじめに

哺乳類のうち, げっし目の動物は地球上で最も繁栄しており, その約42%を占めている。日本列島には, リス科(6種), ヤマネ科(1種), ネズミ科(17種)が分布している。^{1,2)}

人家やその周辺で暮らし, 人の食物やゴミを食べて暮らすハツカネズミ(*Mus musculus*, house mouse), クマネズミ(*Rattus rattus*, roof rat), ドブネズミ(*Rattus norvegicus*, brown rat, Norway rat)の3種をイエネズミとよび, 野外でのみ棲息するハタネズミ(*Microtus montebelli*)やアカネズミ(*Apodemus agrarius*)などのノネズミと区別される。両者の違いは人の生活圏との関わりの有無で, 動物分類学的なものではない。世界中に棲息地を拡大できたのは, 農業社会の発展による備蓄食糧と, ヒト社会の交易の拡大に随伴した結果である。^{1,2,3)}

ラット(ドブネズミ)・マウス(ハツカネズミ)は, 実験動物として獣医学・医学・基礎科学へ貢献しているが, その有用性を除けば, 一般的にイエネズミは不潔な衛生害獣として扱われている。中世ヨーロッパ社会に壊滅的なダメージを与えたペスト禍は, クマネズミのヨーロッパ侵入により, ペスト菌(*Yersinia pestis*)を媒介するネズミノミ(*Xenopsylla ceophis*)によってもたらされた。⁴⁾ 他にもイエダニ(Tropical rat mite)の発生による不快, 汚れ・騒音による企業のイメージダウン, 商品・設備什器・電気系統の破損による経済的損害が, イエネズミにより日常的に起こされている。食品衛生法のガイドラインでは, 食品事業者には年2回以上の

SAKURAI Fujiro : A Study of the House Mouse (Rat) according to Paintings of the Edo Period

1. 慶應義塾大学文学部 連絡先:桜井動物病院 〒132-0025 東京都江戸川区松江3-11-17

TEL:03-3652-9101

(2016年12月25日受付・2016年12月28日受理)

「そ族及び昆虫対策」を義務づけている。^{5,6)} 現実には、ハツカネズミが民家やビルで捕獲される確率は低く、イエネズミによる被害は主にクマネズミ、ドブネズミによりもたらされている。³⁾

ところが時代をさかのぼれば、ネズミは江戸時代にペットとして飼育ブームを起こしたことがあり、天明期にはペット飼育指導書「珍玩鼠育艸(ちんがんそだてぐさ)」も出版され、繁殖力旺盛なことから商売繁盛・家運隆盛の吉祥画題としても再三描かれている。^{7,8)}

今回の研究では、日本人とネズミとの関わりを神話や民話などを照覧し、作者と時代が特定できる3幅の(写実性のある)ネズミ画を素材として、描かれているイエネズミの種類が同定できるかを検討した。

2 イエネズミの分類

イエネズミはドブネズミ(ラット)、クマネズミ、ハツカネズミ(マウス)の3種類である。イエネズミは、一般に越冬するための貯食性や、体脂肪を貯える性質(貯脂肪性)が低いので、屋外での食物が不足するとヒト社会に寄食することになる。³⁾

2-1 ドブネズミ(*Rattus norvegicus*, brown rat, Norway rat)

大型で体重300gを超えるものもいる、頭胴長220~260mm、尾長175~220mm。毛色:背部は灰褐色、腹白、耳は小さく折りたたんでも目に届かない。尾長が頭胴長より短い。中央アジア原産、湿った場所を好む、泳げる、地中に巣穴を掘る。昆虫、ナメクジ、ミミズなどの小型動物を好む肉食系雑食で獐猛、捕えようとする歯をむいて向かってくる。

2-2 クマネズミ(*Rattus rattus*, roof rat)

体重200gまで、頭胴長180~235mm、尾長171~258mm。毛色:背部は褐色か黒、腹黄、尾長が頭胴長より長い。東南アジアの森林地帯原産、樹上生活をするので、垂直の壁を登れる。穀物を好む雑食性。耳が大きく前方に折りたためば目が隠れる。臆病で用心深い。捕えようとする逃げまどう。

2-3 ハツカネズミ(*Mus musculus*, house mouse)

体重15~20g、頭胴長58~103mm、尾長48~102mm。毛色は野生下では黒色・褐色、耳と尾の毛はうすく、尻尾の鬚(輪環)は目立たない、耳は頭の大きさに比して大きく丸い。草地、田畑、河原、土手、荒地、家屋に棲息、種子や穀物類を好む、小型昆虫も捕食する雑食性である。乾燥に強く、コンテナなどに紛れて移動する。^{3,9,10)}

これら3種のイエネズミの絵画上の見分け方は後述する。



図1 ドブネズミ[写真提供：(株)シー・アイ・シー]



図2 クマネズミ[写真提供：(株)シー・アイ・シー]



図3 ハツカネズミ(DBA/2, 動物看護学総論より)
[写真提供：SLC]

3 ネズミをめぐる叢話

3-1 干支

ネズミは干支の初めの動物として知られている。十二支は本来順序を表す記号であるが、子(ね)の年は鼠、丑(うし)の年は牛、午(ご)は馬と、動物を当てはめるようになったのは中国で、暦を覚えやすくするための説が漢の時代にみられる。さらに十二支には方位と時刻が割り当てられており、子午線は南北を結ぶ経線を意味する。江戸時代の時刻は、昼と夜で2分して振り分けるので、春分と秋分以外は昼と夜で時刻の間隔が異なる不定時法である。¹¹⁾

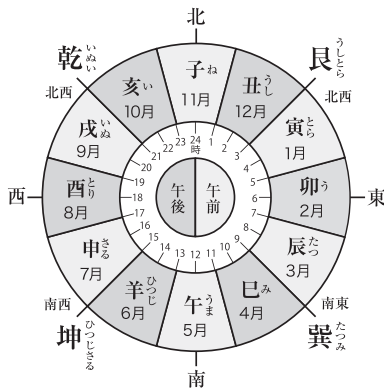


図4 十二支と方位時刻、江戸時代は昼と夜で2分し、昼と夜で時刻の間隔が異なる不定時法。昼夜の時間間隔が当分なのは、春分秋分の時期だけ。
(「暮らし歳時記」ホームページより引用)

3-2 ダイコクネズミ

古事記では、大国主神(オホナムチ)が根の堅州国を訪問し、須勢理毘売命(スセリビメ)と恋仲になると、その父親の須佐之男命から大野に射られた鳴鏑矢を採ってくるように命じられ、火を放たれる。脱出できないオホナムチに鼠が現われ、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と云う。すぼんでいる地面を踏むと、ほら穴に落ちて火から逃れた。鏑矢は鼠がぐわえてきた。矢羽は子鼠たちが食べてしまった。後に大黒信仰と合体してダイコクネズミと呼ばれている、昔話では「難題婿」とよばれる。このネズミの種類は何であろうか。地面に巣穴を作る特徴は、ハタネズミかドブネズミであるが、ハタネズミは小型であり植物の茎など草食を好む。ドブネズミは肉食系の雑食なので、矢羽を食べてしまうような食性はドブネズミのものである。^{3,12,13,14)}



図5 「大黒ネズミ」小堀鞆音画
(蛭田コレクション)

3-3 鼠浄土(鼠草紙絵巻)

お爺さんがあやまって落として握り飯を追って穴へ入ると、鼠たちは大喜び、鼠の国へ案内され歓待された上に土産の宝物をもらって帰る。隣の爺(婆)がまねをして穴へ入り、猫の鳴き声をまねると穴が崩れて埋まってしまう。昔話の「おむすびころりん」の話であるが、ハタネズミやドブネズミよりも小型であるアカネズミも穀物を貯蓄する性質がある。¹⁵⁾

3-4 珍翫鼠育艸ちんがんそだてぐさ(作者は定延子、刊行は錢谷長兵衛)^{7,8)}

江戸時代中期、天明7年(1787年)に「ちんがんそだてぐさ珍翫鼠育艸」が出版されているネズミの飼い方の指南書で(図6)、子供がイエネズミを手に乗せている絵があり、序章には「必ず鼠集まる時には吉事あり」と記されている。ネズミが集まるのは吉祥とされていた。この中には、ミュータント系(突然変異体)の記載と交雑実験による遺伝様式の記述があり(図7)、メンデルの法則(1866年)にさきがけて遺伝現象を記載したり、飼養管理の方法を説明している。(表1)



序
 鼠を飼ひて苦思とる輩
 集はつたとき者あり子生
 作して封はぬるの三百歳の
 夢を経て人選て年中の吉山
 百里の外に事とまをり今又
 こぼつて四鼠と戯ぶと国を及
 沖代のまやう多りと病言一云て
 天明七ひつ下の
 正月
 定規子

図6 珍玩鼠育艸



図7 ミュータント系、頭ぶち、黒眼の白鼠、豆ぶち、熊ぶち、同月の熊
 (珍玩鼠育艸「恒和出版、『博物学短編集(上)』より)

表1 ^{ちんがんそだてぐさ}「珍鼠育艸」目録(目次) ()内, 寺島俊雄現代語訳⁸⁾

- 諸鼠の異名(さまざまな愛玩用ネズミ)
- 諸鼠の絵図(さまざまな愛玩用ネズミの図)
- 鼠糞とやにてさけて置くべき心得の事(ネズミを飼育箱で飼うときに避けるべき心得)
- 同子をうみ候て 心得とやのこと(子を産んだ時の心得と飼育箱)
- 豆白豆ぶちのこと(マメシロネズミとマメブチネズミ)
- 同日々ならびに暑寒食物の事(日々および暑いとき寒いときのエサについて)
- 同鼠強くかふ事(ネズミを健康に飼うことについて)
- 鼠食物の善悪の事(ネズミの餌の良否)
- 同牝牡見分様の事(オスメスの見分け方)
- 鼠種取様秘伝(鼠の育種法)
- 地鼠の事(野生のネズミについて)
- 珍鼠の事(珍しいネズミについて)

3-5 ネズミ取りと殺鼠剤

ネズミ駆除は、ネズミ取り(わな)や粘着テープなどの道具式と、毒物での中毒死による方法の組み合わせである。「猫イラズ」は黄燐製剤で、急性毒性が強く成毛製薬の登録商標である。現在では、クマリン系の血液凝固阻害剤が主流となっている。クマリン系は累積毒剤で継続的に投与する。クマリン中毒にはビタミンK投与が有効であるのは、獣医薬理学の常識である。

殺鼠剤の効果には種差があり、クマネズミは慎重でなかなか食べない上、ドブネズミの致死量の20倍量でも死なない。江戸時代には、「石見銀山の鼠取薬うり」の商売があった。毒物は石見銀山の由来ではなく、実は石見国笹ヶ山鉱山の亜ヒ酸であった。(図8)



図8 「江戸商売図絵」より、三谷一馬著、青蛙房(1963)

4 3幅の江戸絵画の検討

4-1 「二股大根と鼠」西村重長

(元禄10年一宝暦6年, 1697-1756)

重長は、初期浮世絵系の町絵師で

ある。二股大根は女性の下半身の象徴として描かれており、この大根表現の色っぽさは絶品である。夫婦和合と子孫繁栄をネズミに結びつけている縁起の良い画題である。(図9) 東京浅草、浅草寺北の待乳山聖天は、十一面観音菩薩の化身である大聖歓喜天信仰で有名。二股大根と巾着がシンボルで、参詣者は夫婦和合、縁結び、子孫繁栄を祈念し大根を供える。(図10)



図9 二股大根と鼠図(ネズミ左①, 右②)



図10 待乳山聖天の本殿欄間

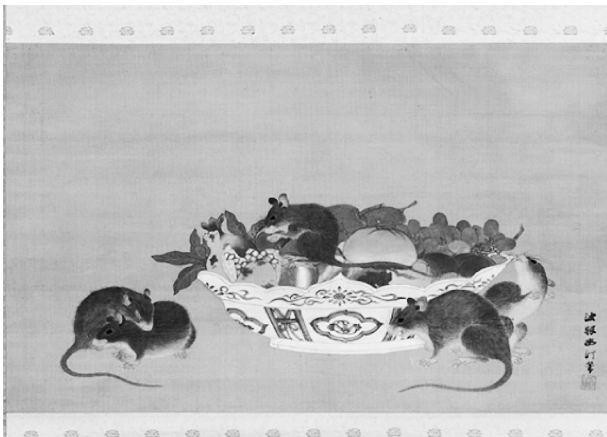


図11 果実と鼠図(ネズミ左から③, ④, 果実の上⑤, 振り向き⑥, 歯をむいている⑦)

4-2 「果実と鼠図」石田幽汀(享保6—天明6年, 1721-1786)

幽汀は、写生画の始祖として有名な円山応挙の師匠で、群鶴図などが知られている。この画の明の染付皿に盛られた果実の柘榴や葡萄も種子が多く、子宝や繁栄の象徴とみることができ、吉祥画のモチーフを満たしている。17世紀オランダ絵画の花、果実、食卓を描く静物画が長崎出島経由で入っていて、意匠を本歌取りしたとも考えられる。(図11)

4-3 「羽箒と鼠」白井直賢(文化年間1804-1818頃に京都で活躍した)

直賢は円山応挙の弟子。ネズミ描きで有名で、この羽箒とネズミのモチーフを何枚も描いている。ネズミの目を漆で盛り上げ、その黒目の中に現代少女マンガのように白く瞳がかがやいているのが今風でクールである。箒は、新年最初の子(ね)の日に皇后が玉箒で蚕床を祓い、祖先神や蚕神を祀る縁起物で、この絵も吉祥画であると判る。鳥の羽をたべるのは肉食系雑食のドブネズミの習性である。(図12)^{11,12)}

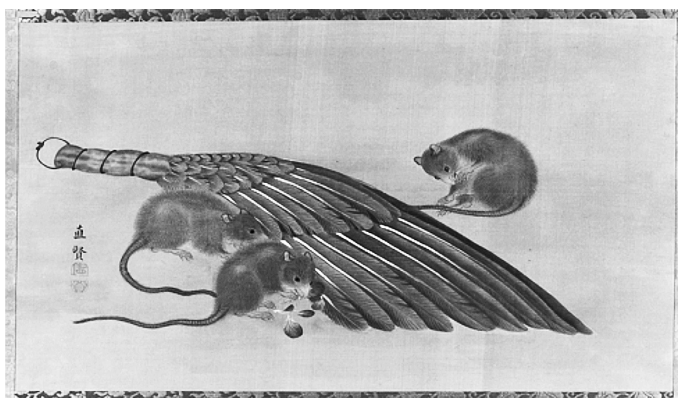


図12 羽箒と鼠図(ネズミ左から⑧, 羽を食べている⑨, 右⑩)

5 判定方法の検討とスコア表作成

5-1 評価法の検討

3幅のイエネズミの絵画は、江戸中期に描かれている。珍玩鼠育艸で紹介されているペットネズミは、ハツカネズミと考えられるがドブネズミの可能性も指摘されている。⁸⁾

そこで予備調査として、マウス・ラットを扱う実験動物関係者、イエネズミ・ノネズミの飼育経験のある動物園の飼育経験者、イエネズミ防除の技術者に3幅の絵画を評価してもらったところ、以下の意見が得られた。

- ① ネズミ以外の対象物(大根, 果実, 羽箒など)と大きさを比較すると, どの絵もハツカネズミにしては大きいので, クマネズミかドブネズミが有力。(全員の意見)
- ② 耳が大きくて折りたたむと眼が隠れるのがクマネズミ, 耳が眼に届かないのがドブネズミ。
- ③ 尾のリングが目立つのが, 大型のドブネズミとクマネズミで, ハツカネズミは目立たない。
- ④ 樹上生活型のクマネズミの木に巻きつくので尾は頭胴長より長い, 巣穴を作るタイプのドブネズミの尾は短い。
- ⑤ 肉食系・攻撃性のあるのがドブネズミ, 果実・穀物を好むのがクマネズミ。……などである。

そこで, 意見を参考にドブネズミとクマネズミの特徴から以下のスコア表を作成し, ポイント制で両者を比較し, 当該項目の多寡で同定を試みることにした。

5-2 スコア結果

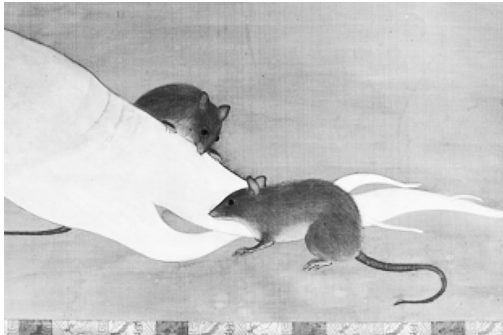


図13 図8の拡大(ネズミ, 左から①, ②)

表2 「二股大根と鼠図」ポイント評価, ドブネズミ8:4クマネズミ

	①	②		①	②
クマネズミ			ドブネズミ		
背腹二色性	○	○	背腹一色性		
尾が長い			尾が短め	○	○
耳が大きい			耳が小さい	○	○
眼が大きい			耳が小さい	○	○
顔に愛嬌がある			愛嬌がない	○	○
種実食	○	○	愛嬌がない		

表3 「果実と鼠図」ポイント評価，ドブネズミ1：22クマネズミ

	③	④	⑤	⑥	⑦
クマネズミ					
背腹二色性	○	○	○	○	○
尾が長い	○		○		○
耳が大きい	○	○	○		○
眼が大きい		○	○	○	
顔に愛嬌がある	○				○
種実食	○	○	○	○	○
ドブネズミ					
背腹一色性					
尾が短め					
耳が小さい					
眼が小さい					
愛嬌がない					○
肉食系雑食					

表4 「羽箒と鼠図」ポイント評価，ドブネズミ15：3クマネズミ

	⑧	⑨	⑩		⑧	⑨	⑩
クマネズミ				ドブネズミ			
背腹二色性				背腹一色性	○	○	○
尾が長い	○	○	○	背腹一色性	○	○	○
耳が大きい				耳が小さい			
眼が大きい				眼が小さい	○	○	○
顔に愛嬌がある				愛嬌がない	○	○	○
種実食				肉食系雑食	○	○	○

6 結果と考察

日本人とネズミとの関わりを神話や民話などを照覧し、作者と時代が特定できる3幅の(写実性のある)ネズミ画を素材として、描かれているイエネズミの種類が同定できるかを検討した。

主観的な判定による曖昧さを克服するため、ネズミを扱う職業人の意見を参照にして、3種類のイエネズミの特徴からスコア表の作成を試みた。3幅のネズミには果実、野菜、羽箒が描かれており、対象物との体長の相対比からハツカネズミを除外し、クマネズミとドブネズミで比較した結果

- 西村重長「二股大根と鼠囀」はドブネズミ
- 石田幽汀「果実と鼠囀」はドブネズミ
- 白井直賢「羽箒と鼠囀」はドブネズミ

と同定できた。

しかし、江戸期にペット化されていたマウス・ラット(ドブネズミ)と異なり、クマネズミにペット飼育の記録はなく、現在でもクマネズミの継代繁殖は困難で実験動物化もなされていない。また、体長測定のものさしがないとハツカネズミとクマネズミを外観から比較するのは難しい。絵画としての見栄えを良くするため、ペット飼育のハツカネズミを大きく描いたものがクマネズミ大になっている可能性があり、モデルはハツカネズミであることも否定できない。クマネズミ説かハツカネズミ拡大説かの判断には、さらなる資料の出現を待たなければならないが、描かれた絵画からのクマネズミ(もしくはハツカネズミ)とドブネズミの判定は可能であった。また、これらの3幅はすべて吉祥画として描かれており、現代では衛生害獣のネズミが、江戸期では縁起の良い動物として描かれていることが確認できた。

7 参考文献・URL

- 1) D.W. マクドナルド編, 今泉吉典監修:『動物大百科5 小型草食獣』, ネズミ型げっ歯類, p50-91, 平凡社(1986)
- 2) 日高敏隆監修:『日本動物大百科1 哺乳類』, ネズミ科, p92-105, 平凡社(1996)
- 3) 矢部辰男著:『ねずみに襲われる都市』, 中央公論社(1998年)
- 4) 村上洋一郎著:『ペスト大流行』, 岩波新書(2006)
- 5) ねずみ駆除協議会企画:『ネズミ, 第2編 行動と被害』, (ねずみ駆除協議会ホームページより)昭和53年(1978)
- 6) 防鼠手引書作成検討委員会編:「飲食店における『ねずみ駆除』の手引き」, ねずみ駆除協議会企画, (ねずみ駆除協議会ホームページより)平成13年(2001)
- 7) 金子之史著:『ネズミの分類学』, p220-224, 東京大学出版会(2006)
- 8) 寺島俊雄訳:『珍玩鼠育艸全訳』, ホームページより(2010)
- 9) 森脇和郎著:『ネズミに学んだ遺伝学』岩波書店(1999)
- 10) 日本実験動物協会編:『実験動物の基礎と技術』, マウス, ラット, p1-50(1989)
- 11) 五十嵐謙吉著:『十二支の動物たち』, 干支(えと), p11-30, 八坂書房(1998)
- 12) 五十嵐謙吉著:『十二支の動物たち』, 鼠・子(ね), p31-47, 八坂書房(1998)

「天平宝字二年(758)正月三日の干支(えと)は丙子(ひのえね)。新年最初の子の日にあたり、平城宮では「玉箒」が下賜されて宴が催され、大伴家持は次の歌に祝意をこめました。

初春の初子(はつね)の今日の玉箒(たまばはき)手に取るからに揺らく玉の緒

…皇后は目利箒(めとぎほうき)で蚕床を掃い、祖先神や蚕神を祀ったそうです」p33

13) 南方熊楠著:『十二支考3』, 鼠に関する民族と信念, p230-291, 東洋文庫288(1973)

14) 倉野憲司校注:『古事記』, 上つ巻, p51-52, 岩波文庫(1963)

「また鳴鏑を大野の中に射入れて、その矢を採らしめたまひき。故、その野に入りし時、すなわち火をもちてその野を廻し焼きき。ここに出でむ所を知らざる間に、鼠来て云いけらく。「内はほらほら、外はすぶすぶ」といひき。かく言える故に、其處を踏みしかば、落ちて隠り入りし間に火は焼け過ぎき。ここにその鼠、その鳴鏑をくい持ちて、出で来て奉りき。その矢の羽は、その鼠の子等皆喫いつ(くいつ)。」

15) 中村禎里著:『動物たちの霊力』, ネズミ, p143-160, 筑摩書房

「それはたしかに、小さくて親しみやすい動物です。けれども同時に、屋根裏や地下に住み、食物をひいたり作物をあらしたりして、きらわれる動物でもあります。ヒトから親愛と嫌悪の両方の感情でむかえられるネズミの二面性は、……」p143

Summary

A Study of the House Mouse (Rat) according to Paintings of the Edo Period

SAKURAI Fujiro¹

Today, mice and rats are known as vermin. We hate them because they eat lots of cereals and cause many diseases. They are called Ienezumi including House mouse (*Mus musculus*), Brown rat (*Rattus rattus*) and Norway rat (*Rattus norvegicus*), that live in the house or around the house. But they were one of the most popular pet animals in the Edo period. First, I studied mythology and folk tales about the relationship between Japanese people and Ienezumi, and to researched three Ienezumi paintings of the Edo period. As a result, I could identify their species and subjects of the paintings.

1. SAKURAI Fjirou

Keio University department of literature

Sakurai Veterinary Hospital 3-11-17 Matsue, Edogawa-ku Tokyo 132-0025, Japan.

TEL : 03-3652-9101